

## 序

私の専門である乳がんは、検診の普及とともに、より早期に発見できるようになり、また、治療法の目覚ましい進歩により、再発後の生存率も確実に改善しつつある。

しかしながら、いまだに進行して見つかる乳がんもあり、本書のテーマであるがん性皮膚潰瘍を伴うケースも散見される。また、一部の局所再発乳がんでは、化学療法に耐性が生じ、難治性の潰瘍を形成してくることもある。こうした場合、おびただしい滲出液および感染に伴う悪臭、時に出血により、患者のQOLは著しく低下し、医療のみならず看護の面でも大きな課題となってきた。

2005年5月、乳がんのチーム医療を実践すべく、聖路加国際病院プレストセンターが誕生した。医師のみならず看護師、薬剤師、栄養士、ソーシャルワーカー、チャプレンなど、多職種のエキスパートが一堂に会して、患者中心の医療を実践するカンファレンスなども頻繁に行われるようになった。そのときの初代センター長が私であり、薬剤師の一人が、本書の編集責任者である渡部一宏氏である。このがん性皮膚潰瘍に対する対策は、プレストチームにとって大きな課題であり、その解決策の一つとして、院内製剤としてメトロニダゾール外用製剤が提案された。以来、この製剤の恩恵に浴した患者は多々いるものの、ひと月に15～20 kgも調製する、薬剤師の方の献身的な努力の賜物であった。

実は、渡部氏と私の出会いは、プレストセンターができる5年以上も前にさかのぼる。当時、聖路加国際病院と国立がんセンター（現国立がん研究センター）の有志が集い、臨床EBM研究会という組織を立ち上げ、文献の批判的な吟味の手法を学び、科学的な根拠に基づく診療体系の整備（のちの診療ガイドライン）に向けた勉強会を定期的に行っていた。その事務局的な役割が渡部氏であった。

この活動が根底にあり、メトロニダゾールゲルに関しては、単に院内製剤の調製にとどまらず、治療効果を客観的に示すための臨床研究の実施や論文、その後の保険適用に結びついた。

今後は、滲出液の吸収率が高く、および臭いも吸着するゲルやガーゼの開発等も期待される。がん性皮膚潰瘍を上手にケアできることは、チーム医療のバロメーターともいえよう。また、地域包括ケアへの取り組みが進む中、本書が医療機関内にとどまらず、在宅医療の現場でも活用されることを祈念している。

最後に、本書の制作にあたり多大なるご尽力をいただいた関係各位に深く感謝を申し上げます。

2016年6月

昭和大学医学部乳腺外科教授・  
昭和大学病院プレストセンター長  
中村 清吾

## 編集にあたって

当時、聖路加国際病院薬剤師の渡部一宏（小生）は、仕事も終わり築地の立ち飲み屋で一杯引っ掛けてから帰ろうと思いつつ…。そのとき1本の電話が薬剤部に響き渡った。

中村清吾：「中村です。あっ、渡部くん。先ほど入院してきた方、がん性皮膚潰瘍で臭いがすごいよ。いつものメトロニダゾールゲル500gをこれから作って欲しいけど、大丈夫？」

渡部一宏：「はい、もちろんです。今から調製して、病棟に持っていきますね。」

このようなことは、幾度あっただろうか。

同院は、キリスト教精神の下に全人的ケアの実現を理念として掲げ、名誉院長日野原重明先生の明確なビジョンと燃えるようなパッション、そして晩年青年を思わせる行動力のもと「チーム医療の実現」を目指してきた病院である。なかでも中村清吾先生（本書監修）が立ち上げ、リーダーシップをとられた同院プレストセンターは、多職種によるチーム医療活動が院内でも特に盛んであった。小生は、薬剤師として入職後から乳がん診療とチーム医療の実践に感銘と興味を持ち、また患者さんから慕われる中村先生の臨床医の姿に敬服し、同院の乳がん診療チームにおける薬剤師として参加する機会を与えていただいた。

チームに関わり始めてまもなく小生は初めて、がん性皮膚潰瘍に苦しむ乳がん患者さんを目の当たりにした。その患部は、目を伏せたくくなるような耐え難い症状で、また患部からのひどい臭いが広がり、その辛さは言葉では言い表せないものであった。「がん性皮膚潰瘍とその臭いに苦しむ乳がん患者さんを何とかしたい」、これこそが、がん性皮膚潰瘍臭のケアに立ち向かおうとした、一人の薬剤師の原点であった。小生は、がん性皮膚潰瘍臭に対して経験的に使われてきたメトロニダゾール外用製剤の基礎研究および臨床研究を実践しそのエビデンスを構築した。さらに、がん性皮膚潰瘍臭改善治療薬メトロニダゾール



(右から日野原重明氏，渡部 一宏氏，中村 清吾氏。  
第 23 回 日本乳癌学会学術総会 (東京，2015) にて)

ゲル(ロゼックス® ゲル 0.75%)の承認に至るまでの開発過程のアプローチまでも関わる事ができた。

本書は、がん性皮膚潰瘍の病態生理や症状についての基本的な情報を提供する事を目的とするのみならず、具体的な臨床事例も加え、臨床現場でがん性皮膚潰瘍のケアを実践するための実践書として企画した。各論ではがん性皮膚潰瘍の臭い、痛み、滲出液、出血等の症状ケアに加え、精神的ケアや家族や介護者のサポートについても各分野のエキスパートに執筆していただいた。また、事例紹介ではがん性皮膚潰瘍に対するケアを現場で実践しているエキスパートに、がん性皮膚潰瘍のケアの工夫等を含めた事例を紹介していただいた。

日常診療において、がん性皮膚潰瘍のケアに従事する医師、看護師、薬剤師などの医療スタッフのみならず、がん性皮膚潰瘍の概念について未知でありこれまで臨床経験がない医療スタッフにもぜひ本書を活用いただき、がん性皮膚潰瘍に苦しんでいる患者さんの QOL 改善の一助となるのであれば、編集にあたった者として望外の喜びであります。

2016 年 6 月

昭和薬科大学臨床薬学教育研究センター  
臨床薬学分野実践薬学部門准教授  
渡部 一宏